

学位（博士）論文要旨

不安定就労者たちの疎外と生きにくさ —個人化社会における居場所に関する社会学的研究—

首都大学東京大学院 人文科学研究科 社会行動学専攻

2013 年度 博士論文

仁井田典子

I 問題設定

雇用が不安定化するなかで、非正規雇用者や無職者、正規雇用者のなかでも非正規雇用者と同等の就業条件で働く人たちなど、不安定な就業状況におかれている人たちが増大している（雨宮 2007；今野 2012）。それとともに「個人化」（Beck 1986=1998）が進行し、不安定な就業状況におかれている人たちは、そうした就業状況に自らが置かれている原因をその個人に帰責される状況を生きている。1990 年代はじめて若年者の就業問題が社会問題化され、非正規雇用や無職の若年者たちは「フリーター」「ニート」と呼ばれるようになった。益田仁（2012）によれば、不安定な就業状況におかれている若年男性たちは、今日の日本社会において、そうした働き方を社会から求められているにもかかわらず、「男性が家計の主な担い手となって働き家族を扶養する」といった社会規範から逸脱した存在として扱われている。その一方で、彼らの存在が容認されているとはいいがたい。そればかりか、彼らは不安定な就業状況におかれている原因が個人に帰責されるといった疎外状況を生きていることが指摘されている（益田 2012）。

しかしながら、「男性が家計の主な担い手となって働き家族を扶養する」といった社会規範から逸脱した存在として扱われ、不安定な就業状況におかれている原因をその本人に帰責されるといった疎外状況に直面しているのは、不安定な就業状況におかれた若年男性たちだけではない。生活のために働き続けなければならない不安定な就業状況におかれた女性たちも同様に、そうした社会規範から逸脱した存在である。それゆえに、彼ら／彼女らは、男性

でありながらも、家計の主な担い手となることができない／女性でありながらも不安定な就業状況におかれ、家計の主な担い手として就業しなければならない、といったような、共に不安定な就業状況におかれている原因をその本人に帰責させられるといった疎外状況に直面しているのではないかと考えられる。

そこで本論文では、不安定な就業状況におかれている若年男性、および、不安定な就業状況におかれ、家計の主な担い手として就業しなければならない女性たちが形成する集まりや、彼ら／彼女らの経験的世界をみていくことで、そうした人たちが疎外状況にどのように対処しているのかを明らかにすることにした。その際、不安定な就業状況におかれている人たちを指し示す概念として、不安定就労者を用いた。「不安定就労」とは、江口英一らが、東京・山谷における日雇労働者たちをとらえる際に、相対的過剰人口のなかでも下層に位置づく停滞的過剰人口であると位置づけ、①就業の不安定性、②賃金の低位性、③労働条件の劣悪性、④社会保障の劣悪性、⑤労働組合による未組織性という特徴を持つものとした概念である（江口ほか編 1979）。こうした江口らの「不安定就労」という概念は、現代の日本社会における不安定な就業状況におかれている人たちの社会背景を含み込むことから、本論文でもこの概念を援用することにした。

II 1990 年代以降の不安定就労問題の構成過程

II では、1990 年代に若年者の不安定就労問題が社会問題化されて以降、「不安定就労問題」は、どのような主体により、どのような問題とされ、どのような対策が行われてきたのか、また、これまでの不安定就労者像がどのようなものであるのかについてみていった。そのうえで、本論文では不安定就労問題をどのようなものにとらえ、III と IV でどのような実証研究を行っていくのかについて示した。

まず、不安定就労問題の対象については、2005 年までと 2006 年以降とで大きく異なっていたものの、共に男性が主な対象とされ、女性にはほとんど焦点があてられていない点で共通していた。そのため、III と IV では、不安定就

労の若年男性たちだけでなく、家計の主な担い手として就業しなければならない不安定な就業状況におかれた女性たちについてもみていくことを示した。

また、マスメディアや行政などにより構成された不安定就労問題（～2005 年）と、不安定就労者たちやそうした人たちを支援する人たちによって構成されたそれ（2006 年～）とは大きく異なっていた。その一方で、それらは共に、社会の「あるべき姿」がすでに想定されたうえで構成された不安定就労問題であるという点で共通していた。けれども私たちは、雇用の不安定化やそれに伴う個人化の影響によって、自分で自分の人生をその時々に合わせて意味づけなおす「リキッド」（Bauman 2000=2001）な自己を生きている。そのため、「あるべき姿」を目指して未来に向かって一貫して努力し続けることを求める政策や支援を、不安定な就業状況におかれた人たちが必要としているとは言いがたいものと考えられる。こうしたことからⅢとⅣでは、あらかじめ社会の「あるべき姿」を想定したうえで不安定就労問題を構成するのではなく、不安定な就業状況におかれた人たちがどのような経験的世界を生きているのかについて明らかにしていくことにした。

Ⅲ 雇用の不安定化に抗する若年男性たち

Ⅲでは、行政の若者就業支援策の主な施策として設置された若者就業支援施設を介して自発的に形成された集まり（＝「集まり」）と、そこに集まる若年男性たちを事例とし、不安定な就業状況におかれた若年男性たちが、自分自身やその集まりをどのように意味づけているのかについてみていった。

「集まり」は、非正規雇用や無職の若年男性たちの集まりであることを除いて、とりたてて共通項がないばかりか、メンバー同士がとりたてて親しい関係にあるわけでもなかった。にもかかわらず、彼らは「集まり」を、自分自身の存在を確認し社会とのつながりをみだし得る居場所であり、かけがえのないものとして意味づけていた。それは、家計の主な担い手となることができないでいることの原因を自らに帰責させられるなかで、彼らが自分自身の存在を確認できず、疎外感を抱えながら生きているからであった。つまり、居場所として意味づける「集まり」において、彼らは自分自身の存在を確認し社会とのつながりをみいだすことにより、雇用の不安定化によって生

じた自らの疎外状況に抗していこうとしていたのである。けれども、この集まりは正規雇用には就いていない若年者たちが就業支援施設を介して形成する集まりであるがゆえに、その施設がなくなってしまうと、彼らは正規雇用には就くために集まっているのだといった、「建前」の理由を失ってしまう。それゆえに、この集まりは制度的な後ろ楯がなくなってしまうと簡単に消滅してしまう、脆弱で一時的なものでもあった。

また、彼らはそれぞれ自分自身について、正規雇用には就いていない原因を自分自身に帰責させられるなかで、自分自身を確認する手段として用いていたものはそれぞれ異なっており、若年者たち個人のこれまでの人生経験のなかからみいだされたものであり、それにより彼らは自分自身を意味づけていた。けれども、彼らはそうした意味づけによって、それぞれが生きにくさに直面していた。

IV 雇用の不安定化に抗する女性たち

IVでは、女性を対象とした個人加盟の労働組合であるコミュニティ・ユニオン（＝「女性ユニオン」）とそこで自ら中心となって活動する女性たちを事例として取り上げ、不安定な就業状況におかれているにもかかわらず、自ら家計の主な担い手として就業しなければならない女性たちが、自分自身やそうした自発的に形成する集まりをどのように意味づけているのかについてみていった。

「女性ユニオン」において彼女たちは、「女性ユニオン」での活動において互いに配慮し合うことにより、ひとりの人間として受け入れられているような感覚を得ていた。また「女性ユニオン」で組合員の女性たちは、自らの考えに基づいた活動が許容されており、それぞれの人生における疎外状況におかれた際の教訓が彼女たちそれぞれの活動に反映されていた。それゆえに、彼女たちの活動の方向性は多種多様で、労働運動としてはより個人的で目的の曖昧な結びつきであった。職場や家庭内において疎外状況におかれている彼女たちは、「女性ユニオン」のような、自分がひとりの人間として扱われ、自分の存在が受け入れられているような感覚を得られる場所を求めており、そこで活動を行うことで、どうにか自分自身の生を意味づけ直し、雇用の不安

定化によって生じた自らの疎外状況に抗していこうとしていたのである。けれどもその一方で、彼女たちの「女性ユニオン」における活動は、それぞれの人生における疎外状況におかれた際の教訓にもとづいたものであるが、それぞれが家庭や職場における自分自身のおかれた状況を活動によって転換させることが難しいといった生きにくさを抱えていた。

V 結論・今後の課題

本論文では、雇用の不安定化に伴う個人化の影響により、「男性が家計の主な担い手となって働き家族を扶養する」といった社会規範から逸脱した存在として扱われ、不安定な就業状況におかれている原因をその本人に帰責されるといった疎外状況に直面している、①不安定な就業状況におかれた若年男性(Ⅲ)、②不安定な就業状況におかれ、家計の主な担い手として就業しなければならぬ女性たち(Ⅳ)の、それぞれ形成する集まりや彼ら／彼女らの経験的世界をみていくことで、彼ら／彼女らが自らの疎外状況にどのように対処しているのかを明らかにしてきた。

彼ら／彼女らは、「集まり」や「女性ユニオン」のなかに自らの居場所をみいだすことにより、雇用の不安定化によって生じた自らの疎外状況に抗していこうとしていた。また、自らがそれぞれ己を意味づけ直すことによって疎外状況から逃れようとする一方で、生きにくさに直面していた。こうした、彼ら彼女らが居場所としてみいだした集まりや疎外状況のなかで自己を確認するための自らの対処は、行政や不安定就労者を支援する人々たちと同様に、社会の「あるべき姿」を前提としたうえでとらえるならば、益田の言うように、疎外状況による不安から一時的に逃れることのできる「緩衝剤」(益田 2012)としてしかとらえられないだろう。しかしながら、私たちは雇用の不安定化やそれに伴う個人化の影響によって、自分で自分の人生をその時々に合わせて意味づけなおす「リキッド」(Bauman 2000=2001)な自己を生きる現在志向的な存在だととらえるならば、たとえ一時的でありながらも、雇用が不安定化するなかで生じた疎外状況において確認することのできる自己以上に強固なものを必要としないものと考えられよう。それならば、これらの集まりや自分自身に対する意味づけがたとえ一時的なものであろうとも、

雇用が不安定化するなかでそれによって生じた疎外状況から逃れ、自分自身の存在を確認できる居場所であるという意味で、彼ら／彼女らにとって意義のあるものとしてとらえることができるのではなかろうか。これらの点を結論として示した。

また、Ⅳでみてきた女性たちは、自らの人生経験のなかで培ってきた考え方をもとにそこで他の人たちのために何か活動をする立場に身をおくことで、自分自身を確認しようとしていた。それに対し、Ⅲでみてきた非正規雇用や無職の若年男性たちは、個人の人生経験にかかわる事柄を持ち出すことで、「フリーター」「ニート」ではない自己をみいだそうとしていた。こうした違いは、ジェンダーによって生みだされたものなのか、集まりの違いによるものなのかについて明らかにすることができなかった。これらの点を今後の課題として挙げた。

主要参考文献

雨宮処凜, 2007, 『プレカリアート——デジタル日雇い世代の不安な生き方』洋泉社.

今野晴貴, 2012, 『ブラック企業——日本を食い潰す妖怪』文春新書.

Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft*, Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局.)

益田仁, 2012, 「若年非正規雇用労働者と希望」『社会学評論』63(1): 87-105.

江口英一・西岡幸泰・加藤祐治編, 1979, 『山谷——失業の現代的意味』未来社.

Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press Limited. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店.)

(にいた のりこ・大東文化大学経営研究所客員研究員)